

な比較が行われることが知られている。当然利益配分の場合には、内集団のメンバーにより多く配分しようとするが、時には自分たちの利益を犠牲にしても外集団より優位に立とうとする、という興味深い現象が観察される。この外見上の「矛盾」は、人間は個人的利益を最大にするように合理的に行為するはずだという、伝統的な(近代的)人間観の限界を示すものである。しかし、社会的アイデンティティ理論を援用すると、この外見上の「矛盾」は説明可能なものとなる。

ヨシヤの改革の担い手は多様な社会集団から成っていたと考えられるが、王と祭司についての規定はとりわけ異彩を放っている。それらは、王についても祭司についても自分たちの権利制限を進んで受容することを前提しなければ成立しない内容となっている。王には自分のために馬「軍事力」・妻・金銀を増やすことが禁止されている(金銀については「過剰に増やすこと」)。そして祭司については土地所有の禁止が規定されているのである。これらはどう説明できるのだろうか。まず王についてであるが、積極的要因としては、古代近東の「王の理想」があげられる。古代近東の王たちは、弱者や貧者を救い正義を実現する、という理想を持っていたが、ユダ王もその影響を受けていたことが明白である。そしてそのことは弱者や貧者を救うために自分の権利を制限する規定を受け入れる、ということが可能にしたかもしれない。それは、社会的アイデンティティを肯定的に高める効果があっただろう。さらに、消極的要因としては、古代近東の王たちとは異なり、ユダの王権がもともと比較的弱かったということがある。古代イスラエルの王は、むしろ

古代ギリシアの王と似た状況にあった。祭司についてはエルサレム祭司と地方祭司を分けて考えなければならない。ヨシヤ改革における祭儀集中によって、エルサレム祭司は祭儀を独占することになる。それは、土地所有放棄を補って余りある利益をもたらしたかもしれない。伝統的な人間観によっても理解可能である。しかし、地方祭司が祭儀集中を受け入れ土地所有放棄を受け入れるというのは、理解しがたい。なぜなら、地方において彼らは事実上失業するからである。しかし、申命記の規定によれば、地方祭司はエルサレム祭司と同様に、エルサレムで祭司として祭儀に参加できることになっている。これは、地方祭司の社会的地位をエルサレム祭司と同等に引き上げることが意味しており、社会的アイデンティティ理論から、充分理解可能となる。

以上検討してきたように、申命記の一見非現実的な祭司と王に関する規定は説明可能である。社会的アイデンティティ理論は、聖書研究にとつて、歴史性を判断する根拠とはならないが、現実性の有無を判断する根拠となりえるものとして有望である。

ユダヤ教聖書解釈における

「預言者」と「祭司」のパラダイム

勝 又悦 子

一 本稿の目的…近代ユダヤ学の創始であるツンツが、第二

神殿崩壊以降のラビたちの聖書解釈の営為を預言者の活動の継承と見なしたり、次世代のレオ・ベックがユダヤ教の中心に預言運動を位置付けているように「預言なるもの」への重視が目立つ。他方、彼らはユダヤ教の祭司的側面には沈黙している。本稿は、ツントツらがユダヤ学の重要な分野とした聖書解釈等の口伝トラーの中で、預言者・祭司の記述を収集し、将来的にユダヤ学創始者のイデオロギーを検証するための予備的考察である。

二 計量上の示唆: *Responsa Project ver. 16, Bal Ilan University* について、ラビ・ユダヤ教文献の範囲で、語根で祭司(KHN)、預言(NBA)の検索をかけると(派生語、接尾辞、接頭語、前置詞等を付随するものも含む)、KHNについては一五六〇一例が、NBAの六八一七例の用例がヒットする。つまり、ラビ文献全体としてみれば、KHNの言及回数が圧倒的に多く、「祭司」に関わる事柄に比較して、「預言」に関わる事柄が著しく重要性を要しているということは言えない。文献のジャンル別で考えると、どちらもミドラシユ・アガダー(聖書解釈)での預言が多いものの、預言については、特にこのミドラシユ・アガダーの言及が、総言及数の八割に及ぶことがわかった。ミシユナ・トセフタなど様々な実生活に関わる法規集のジャンルでは、預言者、預言は、あまり話題にならないという点、どちらかと言えば、聖書解釈のように、ユダヤ教の中では理念的議論になりうる分野において、「預言」は話題になるということが示唆される。更に、ミドラシユ・アガダーの中でも、「預言」は、ヤルクートなど、より後代編纂されたミドラ

シユ・コレクシオンで言及されることが多くなる。以上より、計量的観点からは、タナイーム、アモライーム時代のラビ・ユダヤ教文献全体の見取り図の中では、預言者・預言は、祭司に比較して重要なテーマであったとは言いがたい。むしろ、祭司、祭司職に関わる事柄の方がしばしば口にする話題であったように思われる。勿論、計量的示唆はあくまで目安に過ぎない。

三 資料解説…上記の検索過程で目についた資料からいくつかを解析する。

・祭司と預言者…祭司と預言者がベアで挙げられている用例が散見されるが、歴史的な事象に結びつける場合が多いようである。特に、哀歌二・二〇「祭司や預言者が主の聖所で殺されているのです」に端を発し、これをゼカリヤと読む解釈が多数見出される。しかし、特にここで預言者の側面が重視されることはない。

・預言者と賢者…この二つの組み合わせを擁する資料で注目すべきは「第二神殿崩壊後、預言は預言者から取り去られ、賢者に与えられた」という伝承である(バビロニア・タルムード、ババ・バトラ二a)。この伝承は、ツントツの主張と重なるようだが、しかし、アモライーム時代の文献においては、平行記事は極めて少ない。この解釈の根拠になった詩篇九〇・一二の引用例も少なく、詩篇についての解釈のコレクシオンである詩編ミドラシユにもない。また、この伝承を伝えるハイファアのラビ・アブダミは、ラビ文献中殆ど言及されないマイナーなラビである。しかし、中世以降の文献では、この伝承は言及回数が増えていく。特にレスポンス文学では、何度も言及されてい

る。パピロニア・タルムード時代編纂時には、特に平行記事もなかった伝承が、後年重要性を増していった構図が推察される。他方、民数記ラツバ二〇・一他では祭司の代わりに賢者を位置づける傾向がある。

四 結論・計量的な予備考察であり、今後、膨大な用例を当てる必要があるが、ラビ文献とされるジャンル全体では、近代ユダヤ学が想定するほど、預言者・預言が重大な位置を占めているわけではない。他方、祭司を賢者に置換するレトリックも働いているようだ。

芸術とスピリチュアリティ

——美大生への質問紙調査から——

久保田 力

今日の日本の宗教意識の現状は、一九九〇年代までのように、特定の宗教教団に属して活動を行うのではなく、個人がそれぞれの生活の場に根ざした、芸術創作や癒しや救いのための自助集団活動などによって、いわば草の根的なものへと変容してきており、それにつれていわゆるスピリチュアルなもの、「精神世界」なるものへの関心も深まってきている。

本稿では、そのようなスピリチュアリティへの関心の深まりと、芸術・デザインの創作の志向性がいかに関係しているのか否かという問題意識に基づいて、筆者の奉職する芸術大学（東北芸術工科大学）において、約七六〇名の学生（全学生数の約

四割）を対象にした質問紙調査を二〇一一年一月に実施した。その集計結果と分析の一部の報告を行いたい。

この調査は、二〇一〇年一月に続いて二回目になる。一回目の予備調査時の質問紙は四十一問であったが（約二二〇名対象。その結果については『論集（印度学宗教学会）』三七号、二〇一〇参照）、今年二〇一一年一月の本調査の質問項目は約半数近くを改変し、全四十六問にした。一般的なスピリチュアルに関する問いとともに、ここで特に重視したことは、現代の靈魂観（問1）と、また、生・死・死後について抱くそれぞれの色のイメージ（問2〜4）である。全体の集計結果とその分析については別途報告を予定している（『東北芸術工科大学紀要』一八・一九合併号、二〇一一）。ここでは、結果と分析の一端を報告するに留める。

問1において、「魂（靈魂）」を別の言葉で言い換えるとするばどれが最も近いと思いますか。あてはまるものに一つだけ〇をつけてください。1感情、2命（生命）、3心（意識）、4精神、5人格、6力、7価値、8知性、9理性、10その他（自由記述）を問うた。その結果は、まず男女ともに「4精神」が最も多く（約三四%）、二位は「3心（意識）」（二七%）、三位が「2命（生命）」であった。これと全く同様の傾向が二つの学部別比率結果（芸術学部とデザイン工学部）でも見られた。このことから、現代的靈性のキーワードとして、精神、心（意識）、命（生命）の三つが挙げられる。思想的に考察するならば、これらの三つの概念は、「精神・心」と、「命」という大きく二つのカテゴリーに分けられる。というのは、前二者は、